

平成25年度第3回ゼニガタアザラシ保護管理検討委員会の概要

1. 日時:平成26年3月19日(水) 14:00~16:30
2. 場所:札幌第一合同庁舎10階 共用第3会議室
3. 議事概要

① 海外事例調査及びシンポジウム等の報告について

北海道環境事務所担当官Aより説明があった。概要は以下の通り。

ー2013年度、海外事例調査として、スコットランド3名とフィンランド1名から専門家を招聘した。

ー招聘1日目の3月1日は襟裳に行き、地元の方に向けてスコットランドとフィンランドにおけるアザラシの保護管理について説明し、その後意見交換を行った。約50名出席があった。

ー招聘2日目の3月2日は、札幌で一般向けのシンポジウムを行った。午後1時から午後5時までの間で、第1部えりも地域のゼニガタアザラシの現状を、第2部は、海外の事例を紹介してもらい、最後に羽山先生にコーディネートを頂いてパネルディスカッションを行なった。113名出席があった。

② 環境省保護管理計画(案)について

③ 平成26年度事業計画(案)について

まず、保護管理計画(案)について、環境省担当官Bより、平成26年度事業報告(案)については、北海道環境事務所担当官Aより説明があった。

続いて、漁具の改良について専門家Cより、また個体群動態モデルについては専門家Dより説明があった。概要は以下の通り。

(専門家C)

一般的な漁業被害防除には、音響装置の設置と網の改良の2つの方法がある。後者で良く使われているのは、金庫の入り口に格子枠を入れることである。しかし、防除はある程度できるものの、漁獲量自体も多少減る、さらには枠にゴミが付着して魚の入網に影響がある。

えりもで使用できる格子枠は、フィンランドとかスウェーデンで使用されているワイヤーグリット。これは、重量は鉄で作るよりは軽量にできてかつワイヤーなので潮流による流水抵抗も鉄の格子に比べたら大分小さくできているもの。しかし、えりもの場合はマンボウが入るので、マンボウが詰まってしまうと困るということで、最低限マンボウが通り抜けられるくらいの格子間隔の検証が必要である。

(質問・意見)

網の改良には、①アザラシが網に入らなくなるようにする、②網に入ったアザラシが出られなくなるようにする、の2つの目的があるが、これは単純な構造で2つの役割を担うワイヤーグリットが可能。

(専門家D)

ゼニガタアザラシ個体数調査、通称ゼニ研のセンサスのデータを使って数理解析を

した。その結果、36年間の増加率は北海道全体では3～5%前後、えりも地域では5.79%である。まだ、環境収容力には達していない。増加率は海外に比べると非常に低い。

増加要因は、狩猟が行われなくなったことの影響が大きかったことが示唆された。現状では、年齢構成や生存率のデータ、混獲のデータが不足している。今後は、環境変化とか、伝染病の流行のリスク評価も必要。

(質問・意見)

最大生息可能1200～1500頭とのことであるが、これは上陸場の面積などは考慮してなく、単なるモデルがはじいた数字。

2013年度のヘリセンサスから上陸個体数には見落とし率がかかなりある(上陸岩礁の距離だけでなく個体数によって代わる)ことがわかって来たので、今回のこのモデルでは現状を示しているとは言い難いので、もう一度検討が必要なのではないか。

保護管理計画(案)に対する質問や意見

2年で10頭の捕獲で学術的、科学的根拠に耐えうるデータが蓄積できるように、あらゆる方法を駆使する必要がある(現在、絶滅危惧種である以上、これ以上の捕獲は認められない)。

漁業被害の軽減を図る項目に、定置網以外の漁法での被害軽減に係わること、例えば被害状況の情報収集などの記載を入れておく必要がある。

絶滅危惧種についての再評価については、北海道本土のゼニガタアザラシが対象となるため、道東地域の個体数やその他のデータも収集していく。

直接的な補償はないけれど、間接的には、秋サケでは放流事業にプラスアルファの稚魚を放流できるようにすることや施設の拡充をサポートするような間接的な方法を今後検討してほしい。

H26年度事業計画(案)に対する質問や意見

追い払いとか忌避装置、それから魚網の改良をしてお仕置きをするなどの被害防除には必ず効果検証が必要。

上陸防止柵の検討は、現段階では時期尚早ではないか。

網の改良とお仕置きと音を同時に利用し、音が鳴っているところでは痛い目にあうというお仕置きをさせる。そうすると音が鳴っているところには、近づかないようになるのでは。